

挑む!

大阪大学助教・地震工学者

はた よしや 秦 吉弥さん(36)

地盤のリスク示し 命を守る



熊本を最初の大きな揺れが襲った翌日の4月15日朝、多くの家屋が倒壊した熊本県益城町に調査に入った。16日未明、本震が起きた。「地震があった場所に駆けつけて度々余震に遭っているが、テレビが飛ぶのを見たのは初めて」とすさまじさを振り返る。

地盤の厚さ、硬さといった違いが揺れにどう影響するのかを研究する。本震では、自ら設置した臨時の地震計が国内で観測された最大震度を上回る計測震度6・9を記録。貴重なデータが

1979年、兵庫県明石市生まれ。神戸市立工業高等専門学校を卒業後、広島大学に編入。広島大学院を修了し、日本工営に入社。2013年から現職。

得られた。「今の耐震基準に沿う家も壊れた。同じことが繰り返されないよう、データが被害の解明に役立てば」

原点は中学3年のときに経験した阪神大震災だ。兵庫県三木市の自宅は無事だったが、見慣れた橋や道路が崩れた。「丈夫そうなのになぜ?」。高等専門学校で揺れと橋の関係を研究。大学時代は鳥取県西部地震と芸予地震の被災地で、写真の撮り方といった被災状況の調査手法のイロハを学んだ。

建設コンサルタント会社に就職し、途上国で耐震設計を担った。無防備な建物が多く、資材も限られるなか工夫をこらした。発表した研究成果に目をとめた大学教授の誘いで、大阪大学に転身した。「家を買う際に地盤のリスクを示せれば」。地盤を知ることが人の命を守ると信じ、研究を続ける。

文・後藤一也 写真・滝沢美穂子

記者から

フットワークの軽さはピカイチ。企業での経験も生かし、世界を減災に導いてほしい。